

令和7年度 第1回 豊田市地域経営懇話会 会議録

【日 時】令和7年10月6日(月) 午前10時から午前11時30分まで

【場 所】豊田市役所南庁舎5階 南51会議室

【出席者】(委 員) 今西 モト子 (豊田市ボランティア連絡協議会)
畝部 真紀 (豊田市国際交流協会)
大河原 真吾 (あいち豊田農業協同組合)
小野 英鑑 (豊田市高齢者クラブ連合会)
尾原 洋子 (豊田市ファミリー・サービス・クラブ)
斉藤 尚文 (中京大学名誉教授) «会長»
酒井 辰範 ((一社) 豊田青年会議所)
鈴木 延保 (豊田市区長会)
曽根 篤 (連合愛知豊田地域協議会)
竹内 正美 (小原地域会議)
谷口 功 (椋山女学園大学) «副会長»
藤嶋 伸一郎 (豊田商工会議所)

(出席委員:計12人)

【欠席者】(委 員) 日高 一輝 (豊田市PTA連絡協議会)
佐藤 優衣 (豊田学生によるまちづくり)

【付議説明者】 丹羽 広和 (企画政策部企画課 課長)
伊達 彩乃 (企画政策部企画課 副課長)
上山 輝 (企画政策部企画課 担当長)
加藤 直真 (企画政策部企画課 主査)

【事務局】 竹内 未帆 (総務部副部長)
鈴木 貴之 (総務部行政改革推進課 課長)
尾崎 洸哉 (総務部行政改革推進課 担当長)
平野 麻美子 (総務部行政改革推進課 主査)

【次第】 1 開会
2 会長あいさつ
3 委員の交代紹介、本日の流れ
4 議事
(1) 「第2期 豊田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」実績評価について

【議事】「第2期 豊田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」実績評価について

○委員

- ・名古屋周辺に大学が集まってしまい、学生が少し寄るまちというイメージが薄れているように感じる。そもそも学生の数も減っている。交付金の実績の中に、若者の交流創造拠点整備事業とあるが、市内の大学の有無に関係なく、学生が面白そうだから豊田市に来る、コミュニティがあるから来るということに繋がるような取組を進めると、もっと若い人たちが豊田市に来て、盛り上げてくれるのではと考えている。
- ・豊田市は宅地価格がものすごく高く、移住がしづらいのではないかな。魅力が高い近隣市に人が流れてしまう。

○説明者

- ・2つとも非常に大きなテーマ。学生のいるまちづくりについて、市内の大学・高専をはじめ、近隣の大学と連携を取っている。山村地域におけるフィールドワークや、保見団地での活動等で学生と共に事業を実施している。現在の総合計画の中でも、若者がキーワードであり、まちづくりの大きなテーマとして掲げている。
- ・宅地の話題に関して、これまでは、子育て世代をメインターゲットに四郷駅周辺の整理など、宅地の供給を進めてきたが、婚姻前後といったライフステージや20代向けの賃貸物件等の確保も重要であると考えている。このため、賃貸物件を借りる際の費用や引っ越しの費用などへの支援、既存アパートのリノベーションを促すことによって若者世代に物件を供給するような取組を行っている。地価を直接的に下げるというアプローチではないが、様々な取組を展開していきたいと考えている。

○委員

- ・中京大学で内閣府、豊田市と三社連携による政策提言事業を2020年度に行った。この事業をきっかけに、県営保見住宅の目的外使用権を獲得し、保見団地の日系ブラジル人にシルバー人材センターに登録していただき、草刈を実施する等、まちづくりに関わっている。大学連携はぜひ進めていってほしい。

○委員

- ・小原に住んでいる。今年度ラリーのコースになったが、農山村地域の活性化をラリーでするということに地元がピンときていない。人がたくさん来ても終わったら帰っていく。ラリーの聖地になることで、走り屋が山の中を走り回るようになってしまわないかと恐れている意見も上がっている。中山間地域

についてのラリーの具体的なメリットについて聞きたい。

○説明者

- ・山村地域における観光の側面は一つのテーマであると考えている。特に、下山地区では、三河湖周辺を始め、地元の事業者の方が積極的な取組を展開されている。一方、地区ごとに違いがあることは事実。継続的な取組も必要であり、少し長い目で見ていただければと考えている。

○委員

- ・小原地区はもともとが小藩の集まりだったこともあり、他地区と比べて地区全体を引っ張るキーマンが不在で、コミュニティがバラバラだと感じている。逆にその良さを生かし、小原らしい時間を提供するため、里の駅の設置を考えている。地域ごとのキーマンが異なるので、その人を捕まえながら、地域の人材積極的に育てることが重要だと考えている。わくわく事業などを通じて地域のリーダー人材を育成してほしい。
- ・総合戦略として網羅的に実績をまとめているが、「目標としていたができなかったこと」に注視した方が良い。例えば、豊田市は不登校が多いと聞く。なぜ不登校が多いのか、もっと掘り下げて考えるべきだと感じる。

○説明者

- ・この8年間（第8次総合計画期間）については、超高齢社会への対応として、在宅医療のための人材育成等、公助の側面について取組の拡充を図れたと考えている。しかし、自助・共助の面においては、新型コロナの影響で人が集まる会などが開催できず、つながりが切れてしまった事実もある。新しくつなぎなおすことが大切であるが、その際にデジタルを活用するのか、リアルでつなぎなおすのかという選択肢があると考えている。山村地域においては、特に、今まで地域の担い手だった人が70歳、80歳を超えているという状況の中で、今一度地域へのアプローチについて見直しが必要と考え、今年度から総合山村室を設置している。
- ・できていないことについて、若者への視点が相対的に弱くなっていたと考えている。第9次総合計画及び総合戦略2030では、こどもが将来に向かってどういった絵姿を描けるだろうかというところを大切にしていきたい。

○委員

- ・様々な目標の達成や外部のランキングの結果等を報告されたが、そもそも目標が低いのではという指摘もある、目標の設定の仕方について、次の反省につなげていくためには、水準を高めることも必要ではないか。貧困率やジェンダーギャップなど、グローバル基準で示せるものが他にもあると良い。
- ・社会の変化に一番敏感なのがこどもたちであると考えれば、学校教育の在り方に限界が来ているということの現れが、不登校の多さであると考え。一方で、ありのままの自分でいられるという側面もあり、幸福度を測る指標とし

て良い相関ではないような気がする。このような成長路線的ではない視点がどのように問われるかは疑問である。

- ・委員として参加しているおいでん・さんそんプラン策定の議論でも、山村地域から若者がいなくなることを懸念しているにも関わらず、足助高校の価値を高めるような議論が無く、より良い所へといった話が地域の住民から出てきてしまった。市内の高校や中学校に通っていることに対して、もっと価値を持てるように盛り上げていかないと、本当のこども視点には立てないのではないかと感じる。
- ・地価について、単に宅地供給を行っても、新しい住民が増加するほど、地域活動や住民組織への加入率は下がっていく。宅地が増えて人が増えることだけでなく、どう地域活動に住民がコミットするのかを考えたほうが良い。

【そのほか意見交換】

○委員

- ・学生、若者という言葉が本会の中でたくさん出ていることが嬉しい。中学卒業後に就職・進学しても夏休み頃に退職・退学してしまうようなこどもたちを見てきた。そういったこどもたちのつなぎ先として地域に居場所を作ろうと考え、10年近く前にこども食堂を立ち上げた。以前こども食堂に通っていた子が数年ぶりにやってきて、就職の報告に来てくれた。21歳になっても思い出して来てくれたということが嬉しく、切れ目なく穏やかにつながる居場所とは、こういうことではないかと感じた。
- ・総合戦略2030の基本目標③について、「若者」という言葉がないことが気になる。各課が色々なことをしているが、一言入れるだけで意識が向くと思う。中高生が自分自身の体と向き合い、大切に守るということに気付けるよう、10代20代へのプレコンセプションケアに関する教育を本市でも推し進めてほしい。

○説明者

- ・プレコンセプションケアについては、テーマとして議論を行っている。何らかの形で中高生の方へ展開していきたい。

○委員

- ・豊田市南部の地区の過疎化について触れられていない。基幹バス運行事業とあるが、おいでんバスは無く名鉄バスだよりでそれも一日5本程度。地域バスは予約が必要で病院にも行きにくい状態。普段の生活圈やこどもの進学先も岡崎や名古屋市で、豊田市を選ぶことがない。
- ・キタラの駐車場について3時間無料から5時間無料にしてほしい。映画を見てすぐ帰らなければならないなら、近隣の映画館と比較して、キタラは選ばれない。市税を投入して映画館を作ったのに、市民が使えているのか疑問。
- ・読み聞かせボランティアを行っている。こどもたちに対しては、教室に入れな

い時は図書館においでと呼び掛けている。こどもとの繋がりは引き続き作っていきたい。

○説明者

- ・生活圏について、小原地区、稲武地区は岐阜県、下山地区であれば岡崎、高岡上郷であれば知立・安城ということもある。現実の市民の生活と行政界が異なることはしっかりと意識していきたい。バスについては、乗り支えるという視点も重要であり、さまざまな取組を進めているところだが、今後、すべてが好転していくとは言い切れない。
- ・フリーパーキングについて、現状、映画館と飲食店の組み合わせで5時間というサービスが提供されている。映画館だけで5時間というサービスについては、ご意見として受け止めさせていただく。

○委員。

- ・わくわく事業はとても評価している。地域のリーダーづくりにわくわく事業がうまくはまると思うので、整理して高めていくことを考えてほしい。オバラあかりの華、軽トラあんどんパレードは去年の日本イベント対象で全国7位になった。わくわく事業を活用することで、地域のオリジナリティが出るし、地域の持っているクリエイティビティも出てくる。

○委員

- ・以前の会議でも、フリーパーキング3時間の話は出ていた。当時はできるだけ公共交通機関を使ってほしいと言っていた。

○説明者

- ・公共交通を活用していただきたいことに変わりはない。

○委員

- ・ファミリーサービスクラブは、今年で39年目を迎えたボランティア団体。電球変えてほしい、買い物行ってほしい等家庭内のちょっとした困りごとに対し、依頼会員と援助会員のマッチングを事務局で行っている。1時間700円で依頼会員と援助会員の双方がWIN-WINの関係が作れるよう活動している。最近依頼内容の傾向が変わってきており、地域包括支援センターや高齢者施設を通じて、高齢者からの依頼が増えている。介護保険では対応できない部分の通院の付き添いやベッド周り以外の家の掃除、市役所手続きなどの依頼を受けている。

社会福祉協議会と市のよりそい支援課が身寄りのない高齢者への支援を始めたが費用が高く、依頼者が支払えるのか疑問に感じた。市内には年金が無いと私たちへの依頼もできないような方もいる。総合戦略2030の目標を見ると、元気な人中心に考えてられているように見受けられるが、本当に困っている人が安心して暮らせるまちが良いと考える。以前にも、依頼者に市役所からアンケー

トがきたが寝たきりで答えられなかった。認知症や寝たきりで手紙が来ていることもわからない方や自分の意思を伝えることができない方もいる。

- ・ 公立こども園のICT活用事業について、こども園からのお便りをネットアプリのコドモンを利用して配布していると思うが、園によってはお母さんたちが見ないからと紙に戻したり、口頭で伝えたりしているという話を聞いた。せっかく良いものを使っているのに活用できていない。

○説明者

- ・ 福祉に関する取組について、地域共生社会の推進に関する全国サミットの開催に象徴されるように、取組を充実するとともに機運の醸成を図ってきた。今後においても、様々な改善等を行うため、事業者とのネットワークづくりも進めているところであることは御理解いただきたい。「若者」という言葉がないという御指摘については、PRという視点からも表現や書き方については気をつけるようにしたい。
- ・ 不登校、8050問題など見えていない、見えづらい課題へのアプローチは大きな課題だと認識しており、ネットワークづくりについて考えていきたい。
- ・ コドモンについては、こども園の担当部門とコミュニケーションをとって原因を見ていきたい。

○委員

- ・ AIやロボットにより都市がデジタル化していくが、それを補完するアナログがどこかに必要であると感じるため、山村地域に住んでいる。AIの便利さを受け入れるだけでなく、その負の部分についても行政としてチェックしながら広めてほしい。デジタルを上手に活用することで、山村地域に暮らす人も増えるのでは。

○説明者

- ・ 価値の多様性の観点でのご意見をいただいたが、この観点は総合計画策定の議論においても出ていた。価値の捉え方など様々なご意見をいろいろな方からお聞きしながら取組を進めたい。

○委員

- ・ 映画館駐車場について、安いものには安い理由がある。近隣市にはショッピングモールの維持という課題があって価格設定をしている部分もあるので、あまり比較する必要はないように感じる。
- ・ こどもや若者に焦点を当てるならば、大人がもっと楽しめるようなわくわく事業や地域活動、働き方の展開が必要だと考える。こどもたちがそれをみて、こんな風に地域で楽しめるんだ、こんな風に働けるんだと知ることができると、ロールモデルを見たことによって、こどもたちはその地域に住み続けたいくなる。行政としては、本当に大人が楽しんでいるか、楽しめているかを考える必要がある。一方で、こども若者に対する取組については、例えば助成金等に中

高生や若者が申し込める仕組みがあるかと問われると、行政側は固まってしまう。小学生も起業みたいな話が出てくる中で、ひとりのプレイヤーとして、行政が位置付けられる仕組みがあるかどうかということは、新しい社会の価値というところで考えてほしい。